

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

英語、日本との
接触を受けたスペイン話者集団スペイン語の性
向と安定
—国際結婚による家族の3言語使用会話分析—

メタデータ	言語: spa 出版者: 公開日: 2015-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1866

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



博士論文審査の要旨

1. 論文の概要

本論文は、日本における多言語使用の実態に関する研究である。スペイン語で書かれており、標題は「日本語との接触を受けた日本のスペイン語話者集団のスペイン語の性向と安定性 ——国際結婚による家族の3言語使用の会話分析——」という意味である。「序論」、第1～4章、「結論」の6つの部分と付録から成る。議論の基礎となる実態記述を前半の2つの章（第1～2章）でおこない、中心的考察を後半の2つの章（第3～4章）でおこなった上で、結論を導いている。

序論の章では、多言語使用の研究において、日本語、英語、スペイン語という3つの言語を対象にした考察がほとんど存在しないことを指摘し、これをテーマに選んだことが述べられる。

第1章 *Multiculturalidad en Japón*（日本の多文化性）では、日本においてスペイン語・スペイン語話者の占める位置が、他の言語・その話者と比較しつつ示される。

第2章 *Grupos hispanohablantes en Japón*（日本におけるスペイン語話者集団）では、日本におけるスペイン語母語話者の言語生活を記述する。特に、英語の干渉に焦点が当てられている。

第3章 *Análisis sociolingüístico a través de las redes sociales de diez individuos*（10人の社会的交流を通じての社会言語学的分析）では、日本在住の10人のスペイン語母語話者の言語生活を詳細に記述し、その特徴を探る。

第4章 *Análisis conversacional de un caso de trilingüismo desde el punto de vista de la alternancia de códigos*（コードスイッチングの観点から見た3言語使用の事例の会話分析）では、夫（スペイン語母語話者）、妻（日本語母語話者）、2人の娘から成る家族の食卓での会話を対象に、スペイン語、日本語、英語がどのような条件で用いられているかを分析する。

結論の章では、次の諸点が示される。① 多言語話者は状況に応じて、単一言語使用、2言語使用、3言語使用のいずれかを選択する。② 単一言語使用は、主に職場や公共の場で用いられる。③ 2言語使用、3言語使用は主に私的な場で、対話の相手との関係によって選択される。④ 単一言語使用の途中でも、話者がその言語に十分習熟していない場合は多言語使用に移行することがある。

そして付録として、第2～3章の議論の基礎となったアンケート調査の内容と、第4章の分析の対象となった会話の内容が掲げられている。

2. 全般的評価

本論文は次の諸点で評価に値する。第1に、日本語、スペイン語、英語の3言語使用の状況下に見られる現象という、先行研究の乏しい、しかも興味深いテーマを選んだこと。

第2に、日本で生活するスペイン語母語話者は、英語の使用が求められる場合が多く、3言語使用の状態が生み出されるという、現実を踏まえた議論であること。

第3に、スペイン語母語話者の言語生活や、3言語使用の実例についての詳細で示唆に富む記述を提供したこと。

第4に、導かれた結論は、現実を正確に捉えた妥当なものだと考えられること。

一方、内見審査の段階では、次の問題点が指摘された。

第1に、得られた結論が、果たして日本語、スペイン語、英語という3言語であることから得られたものかどうかである。即ち、本論文の結論を導くには、この3言語である必要があるのか、任意の3言語でも得られることなのかを、より明確な形で示すべきであろうという問題である。最終稿においては、この点への考慮が払われ、「得られたデータと結論は、日本におけるスペイン語話者が英語をも使用する状況に限るものである」との見解が加わった。十分説得力があるか、なお疑問が残るが、ともかくもこの問題に対処し内容を改善したことは評価できる。

第2に、大がかりな調査から導かれたにしては、結論がやや平凡に見える点が指摘された。最終稿ではこの問題を解決すべく、結論をより一般性の高い形に改めた。ややもすると、まだ記述の列挙のように見える点が散見されるが、内容がかなり改善された点は評価すべきであろう。

第3に、論文執筆者自身が分析対象の一部になっているのは、あまり好ましいとは言えない(第4章の家族の会話における夫)。データを豊かにするために、意識的にコードスイッチングを多用して、通常の言語使用から逸脱してしまったかもしれない。そこで内見審査では、論文執筆者に、「この会話時には、そうならないよう、努力したであろうから、少なくとも、上記のことを論文中で、さらに明確に公表しておくべきであろう」と助言して、改善を求めた。最終稿では、この問題への考慮が十分に払われ、pp.197-198を中心に、上記の事情についての詳しい説明がおこなわれている。

第4に、内見審査の段階ではかなりの数の表記の誤り、不統一が見出される点が指摘された。最終稿ではそのほとんどが修正された。

以上のとおり、本論文は多言語使用に関する研究としての独創性と記述の豊かさの点で高く評価でき、かつ、以前に指摘された大きな問題点は概ね解消されたので、学位請求論文としての水準に達しているとみなすことができる。

最終試験結果

最終試験は、2015年2月3日、本学三木記念会館で実施され、福嶋教隆(主査、司会進行)、Montserrat Sanz、成田瑞穂の3名の本学教員と、ナカガワ・マルガリータ大阪大学特任講師が審査にあたった。審査は公開で行なわれ、最

初に学位申請者が論文要旨を述べた後に、各審査委員が論文に対する意見、感想、質問を述べ、申請者が回答するという形式で進められた。

審査員からは、上記の「博士論文審査の要旨」に記したさまざまな講評をはじめ、内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。

第1～2章については、次のような指摘があった。① 日系1世を *descendiente* に含めるのは表現に問題がある (p.22)。② 「スペイン語の教育」と「スペイン語による教育」の混同のようにとれる箇所がある (pp.38-39)。③ 「日本におけるスペイン語の研究教育への援助が不十分である」といった批判は必ずしも当を得ていない (p.39, p.57)。④ 被験者集団に「スペイン語非母語話者の日本人」が含まれているが、これは *grupo de control* であることを断る必要がある (p.77)。⑤ *japoneses retornados* (スペイン語圏在住経験のある日本人)、*ocio social* (社会的な娯楽)・*ocio familiar* (家族での娯楽) といった用語の規定があいまいで誤解を生む恐れがある (本論文では前者を「20歳代の帰国子女」の意味で用いる。後者では「友人との交際」をも *ocio familiar* に含める) (p.117 他)。⑥ 「日本在住のスペイン語話者はスペイン語の経済的価値を高く評価している」と言うが、それを高く評価するのは、むしろ日本人ではないか (p.134)。

第3章以降については、次のような指摘があった。① 論文執筆者自身が第3～4章の被験者の1人をつとめていることが、第4章で明らかにされるが、第3章でもっと明示的な形で断るべきであろう。② 第4章で「スペイン語圏からの帰国子女および日系人においてスペイン語は維持されている」と述べているが、次世代においてもそうなるか (p.225)。③ 結論の章に列挙された記述は学界にどのような形で貢献すると言えるか (pp.217-221)。④ 提出された「要旨」には、主に問題提起が述べられ、どのような結論に至ったかが十分に記されているとは言えないので、加筆が望ましい。

学位申請者は、これらの質問に対して誠実に回答し、主張すべきところは適切に主張し、指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れ、必要な修正・加筆を約束した。最後に会場の参加者からも質問、意見を得て、公開審査は終了した。

公開審査後、4名の審査委員は別室で協議を行なった。本論文は、先行研究の乏しい、しかし重要なテーマと粘り強く取り組み、幅の広い調査を踏まえて、有益なデータを多数提供することによって、日本の多言語使用に関する研究に大きな貢献をしたことが評価された。

そして、本論文が博士論文として十分な価値があり、論文執筆者に博士(文学)の学位を授与するに価することを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。